A区検6

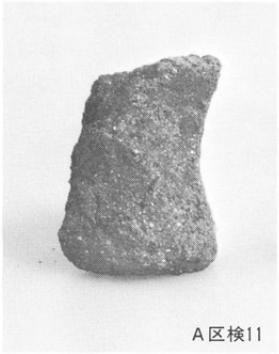
A区検7

A区検8

A区検9

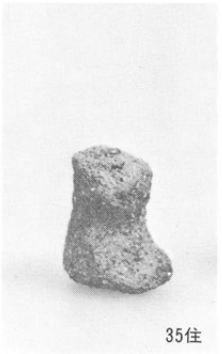
15住

A区検10


A区検11

A区検12

排土


35住

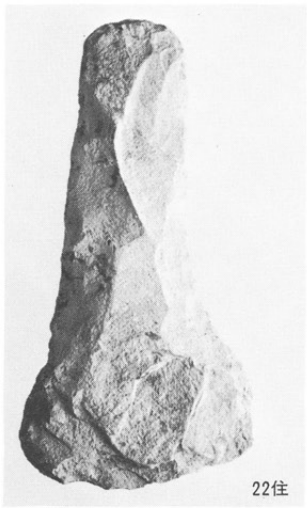
25住

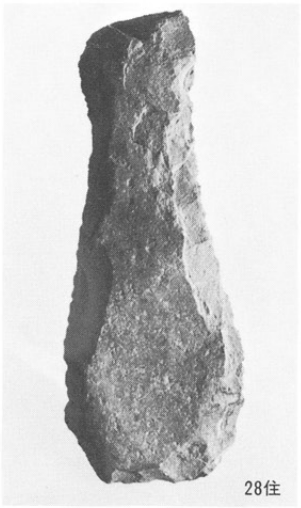
A区検13

A区検14

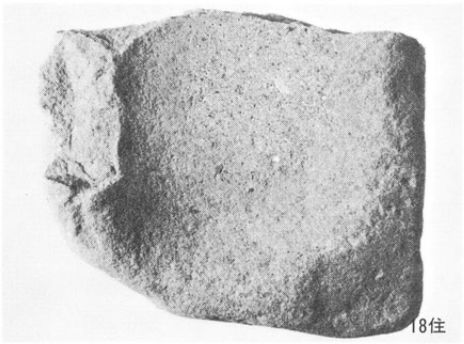
15住の1点はワイングラスの脚のような感じでミニチュアとした方がよかろう。A区検14は表裏に渦巻文が付く手部分と思われる。

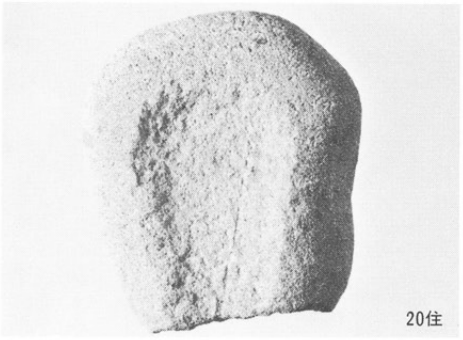
土偶 (5)

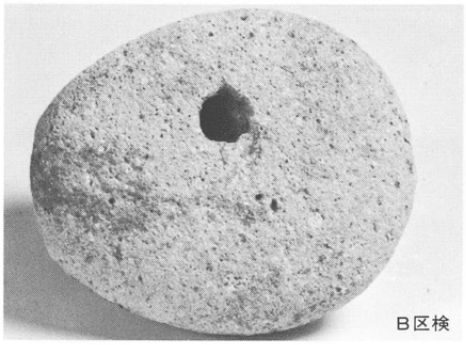

22住

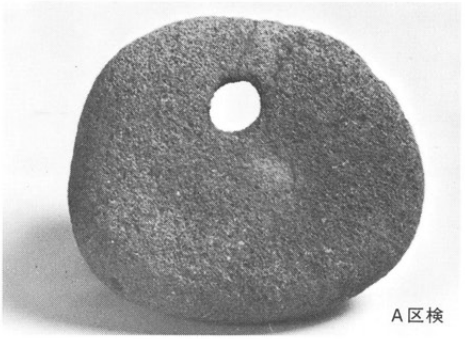

28住

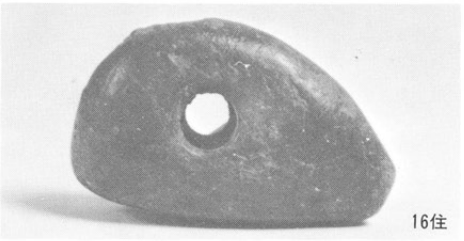
排土


18住


20住


B区検


A区検


16住

22・28住はいずれも撥形打製石斧。凹石は表裏に凹部と磨面が明瞭なもの。石皿２点のうち20住は皿部に目立てがある。有孔石製品はいずれも直径８㎝以下、厚さ１～３㎝で、砂岩（Ｂ区検）、安山岩（Ａ区検）、チャート製（16住）で前二者には孔上部に紐当ての痕跡が残る。

住居址 遺物	口　径 (cm)	底　径 (cm)	器高(残存高) (cm)	備　　考
4住埋甕	35.7	12.5	55.5	胴部内面部分的に黒変する。
5住埋甕1	23.1		(26.3)	
5住埋甕2	21.6		(14.1)	
7住		13.8	(10.0)	台付土器の台部。
8住埋甕	27.1		(26.3)	
8住	14.2	8.4	14.0	釣手土器。内面が黒変する。
10住埋甕	31.5		(31.1)	
12住埋甕		8.7	(32.9)	胴部内面が黒変している。
15住埋甕	30.3		(35.3)	
19住		5.0	13.5	台付壷で台部欠損。
20住埋甕	17.6		(19.3)	
29住埋甕	19.5	8.7	24.8	口縁部は全周、わずかに欠くのみ。
30住埋甕	21.9	7.5	26.9	胴下半部に多量に煤が付着。
30住		8.7	(7.0)	「30住埋甕」内部にあった。
35住埋甕		6.6	(22.9)	
36住埋甕？			(35.0)	有孔鍔付土器
37住埋甕		13.0	(53.0)	
38住埋甕		6.6	(23.2)	外面胴中程より上部に薄く炭化物付着。
38住	8.6	7.0	19.3	〝把手付片口壷〞
38住釣手1		7.7	20.8	
38住釣手2				
42住埋甕		7.3	25.5	
47住埋甕1		7.0	(23.8)	
47住埋甕2			(14.1)	胴中部で見事に切断する。
11住ミニチュア土器	2.8	2.8	3.8	
20住ミニチュア土器		3.6	(1.5)	
31住ミニチュア土器	4.0	1.5	2.9	
34住ミニチュア土器	2.2		3.6	
36住ミニチュア土器	3.3		2.8	

第2表　土器計測表

第4章　ま　と　め

今回の調査で塚田遺跡は縄文時代中期後葉を中心とした大遺跡であることがわかってきた。ここでは弥生時代の1軒を除き、これらの住居址で壊されていた炉と数多く見られた埋設土器についてまず触れ、祭壇をもつ住居址についても小考を加える。

炉の様子のわかるものは46軒中43例である。このうち炉石の抜き取りが認められるものは約4割、18例がある。時期別に見ると曽利III式期（以下○期と省略する）の11、II期4、I期1、II～III期1、不明1例であった。破壊されないまま残った炉は25例ある。このうち一方のみ炉石を置く石置地床炉としたものは2例、地床炉1例（いずれもIII期）である。また二方ないし三方に、あるいは全周を石で囲む石囲炉は22例ある。時期は不明の3軒を除くとIII期9、II期5、V期3、I・IV期が各1例となる。これらの平面形状は方形が多いが、II期の2例（18・32住）は長方形を意識している。また楕円形（4住）、円形（22住）もやはりII期に当たり、既に言われているように炉の平面形は時期との関連性があるといえよう。

住居址内の埋設土器は4割近い18例ある。このうち土器を複数もつものは入口部3、奥壁部1の4例である。いずれも2個ずつで、4例とも2個体の土器を、埋設用に掘ったピットが接するほど近い距離に位置させている。埋設の形は正位のものは2個とも正位に、転倒させたものは2個とも逆位に埋めており、正逆という組み合わせはない。正逆の比は1：3で逆位が多く、逆位6個体のうちの1個、正位2個体のうちの1個が蓋石を乗せてあった。これら4軒の住居址は全てIII期である。一方単体で埋設したものは14例ある。これらのうち正位のものは10例、逆位のものは4例あり、この中で正位3、逆位2例に蓋石があった。住居址の時期ではIII期の11例をピークに、II期2、IV期1例となるが、埋設のかたちなどに時期による傾向は特にないようである。

さて埋設に使用された土器は、36住の有孔鍔付土器の1点を除くと、全て深鉢で唐草文系土器を中心に加曽利E系土器も見られ、2個を埋設するものは同系の土器でしかも非常によく似た文様の土器を用いている（5・8住と47住）。次に埋設の際の土器加工の様子を見ると、正位のものは29・30住の2点を除いて、口縁部を欠き、また逆位のものは4住の1点以外、底部を欠いて使用していた。これは単に先に造っておいた床面に合わせるための作業と考える。

ではこれらの埋設土器とさきの炉との関係はどうであろうか。埋設土器があり、炉石が抜去されているものは18例中7例あり、39%を示す。さきの43軒のうち炉を破壊されているものは約4割であった。この数字から埋設土器は中途廃絶した住居址にも普遍的に遺存するといえよう。

なお全体を概観して気づいたのであるが、A区は7軒のうち6軒が逆位、B区は11軒のうち10軒が正位で、この数字を見る限り、集落内での住居址の位置（場所）が土器埋設のかたちを決定しているようである。このことについては他の遺跡と比較していないので、類例を待ちたい。

第7・10・38号住居址に見られる祭壇状施設について

今回発掘調査では、住居址内に祭壇状の施設をもつもの3軒が検出されたほか、土鈴2点、土偶数十点などが出土している。今回は遺物の整理が十分に行われていない状態のため、個々の遺物の検討や、それらの集落内での位置付け等の分析は困難である。ここでは遺構を中心に若干の考察を行ってみたい。

住居址内に祭壇状の施設をもつものは、A区の7・10住、B区の38住である。

7住では住居の奥壁部の主軸よりやや東寄りに約80cm四方の祭壇状施設が作られている。外側を囲むように礫が並べられ、中にはそれよりやや大形の礫が敷かれており、周辺の床よりも約10cm程高くなっている。礫は砂岩・安山岩が用いられており、部分的に被熱が認められる。中に敷かれた礫の一部は被熱により砕けていた。礫で囲まれた部分の中は黒色土で埋没しており、中には少量の焼骨片が見られた。下層には施設等は認められなかった。住居址の時期は曽利III式期併行である。

10住では住居の奥壁部の主軸よりやや北寄りに約40cm四方の祭壇状施設が作られている。中心に置いた礫の回りを囲むように礫が並べられている。施設自体は奥壁部の柱穴間をつなぐ周溝を埋めた上に作られ、周辺の床より約10cm程高くなっている。その手前には周溝と同じ深さの溝状の穴があった。礫は美ケ原周辺のものと思われる安山岩が用いられており、部分的に被熱が認められる。下層には周溝以外の施設等は認められなかった。住居址の時期は曽利III式期併行である。

38住では住居の奥に向かって左側の壁沿いに柱穴間をつなぐように、床より5cm程高い祭壇状施設が作られている。黄色土を固めて壇が作られており、表面はほぼ平坦で非常に固く、しまっている。周辺の覆土中には多量の焼骨片が認められた。壁際には断続する周溝が巡る。壇状になった部分は奥壁側と入口側の柱穴の脇にそれぞれ礫が置かれており、それによって奥壁側・中央部・入口側と大きく3つに区画されている。

奥壁側の区画に用いられている礫は磨石1点を除き自然礫で、壇上にも特に遺物等はない。

中央部には、奥壁寄りに無文の浅鉢、入口寄りに壷型土器があった。浅鉢は段の上面を5cmほど掘りくぼめ、そこに据えるように置かれていた。また2つの土器の間からは長さ10cmほどの大きな焼骨片が出土している。

入口側と中央部の区画には、石皿と砥石が使用されており、石皿の脇からは石鏃1点が出土している。またその中央部寄りに、区画のためと思われる2本の浅い溝が掘られていた。壇上からの遺物の出土は、入口寄りの部分が多く、特に柱穴の周りに集中していた。入口側の柱穴のすぐ脇に釣手土器があり、その横には唐草文系の深鉢が逆位で置かれていた。さらにその脇には、胴部下半を欠く重弧文をもつ深鉢が、壇を2cmほど掘りくぼめたところに据えられていた。

この住居址からは、もう1点の釣手土器が炉の手前の床面直上より出土している。また住居は廃絶時に焼けている。時期は曽利II～III式期併行である。

このような中期後半の祭壇状施設をもった住居址は、中部高地では数十例が報告されているが、松本平では報告例が少なく小地域での様相は明らかになっていない。ここでは周辺地域の報告例と比較して考察してみたい。

石材を使った祭壇状施設の報告例は多いが、7・10住のような形態のものは少ない。石材を用いたものの中には立石等を伴ったものと、そうでないものがあり、地域による形態の違いや、祭祀の内容自体になんらかの違いがあったものかもしれない。

38住の祭壇状施設は住居址の一辺全体に亘っており、過去の報告例の中でも際立って大きく、特異なものである。また位置も通常では奥壁側に設けられることが多いなかで、特殊なものである。伴出した遺物を見ると、釣手土器を伴った祭壇的な施設は駒ケ根市辻沢南遺跡、諏訪市穴場遺跡などにあるが、祭壇状施設内に土器を埋め込むようにして据えたものには類例がない。また1軒の住居址から複数の釣手土器が出土した例も少なく、この住居址の特異な性格の一端を示すものと考えられる。この住居址のような祭壇状施設などをもつ住居址の火災による廃絶例は、高森町増野新切遺跡、日義村マツバリ遺跡（未報告）などでも見られ、故意の火災による廃絶が祭祀の1つの過程として行われていたのではないかと思われる。

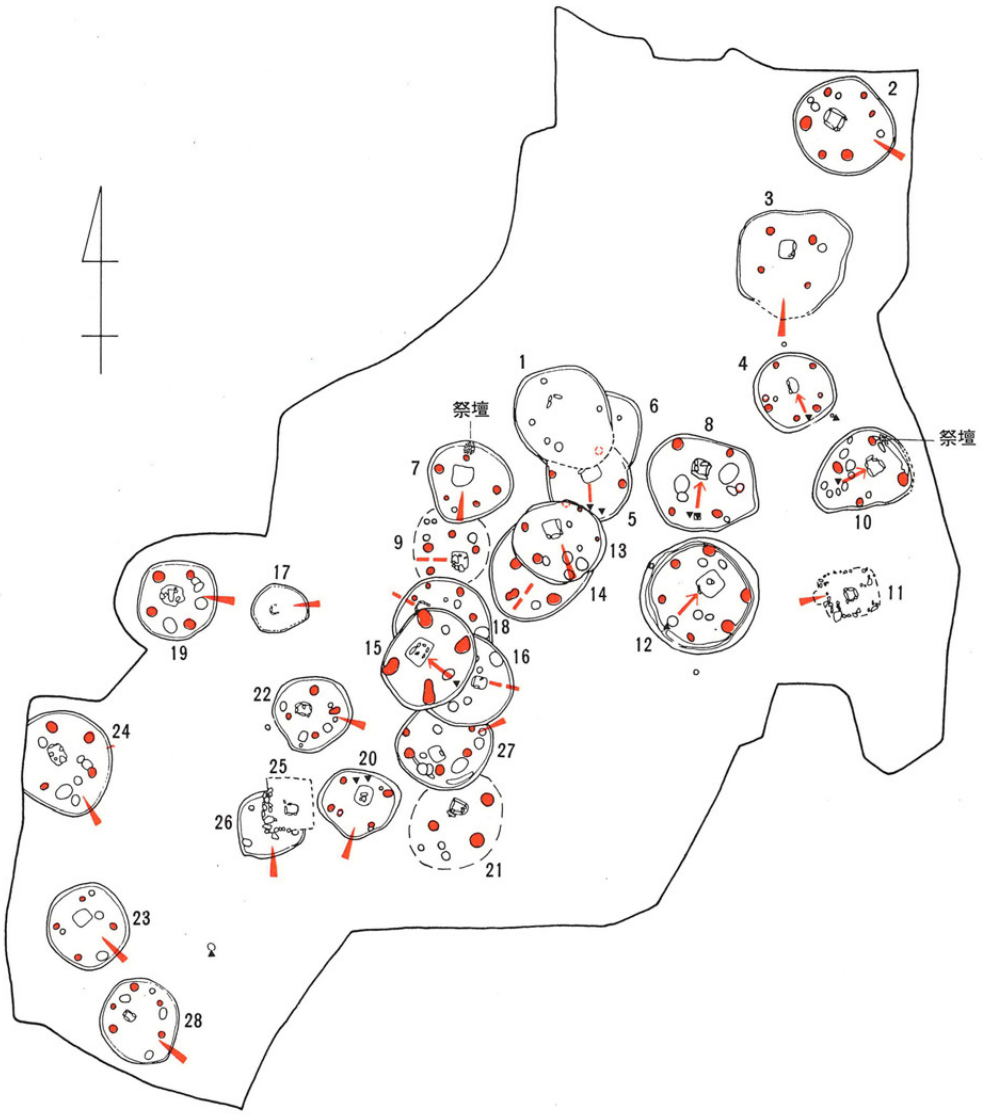
祭祀の具体的な内容については、かつて桐原健氏が狩猟にかかわる祭祀の施設としての位置付けをされている(註)。炉内の火によって焼かれ清められたものを豊猟を祈って供献したというものである。今回調査された3軒の住居址の祭壇状の施設を見ると、形態等の差異はあるものの、被熱した礫や焼骨片などの共通点が認められる。壇上の遺物の性格など詳細についてはなお検討の余地があるものの、桐原氏の指摘された性格を裏付ける点が多いものであると考えたい。

また奥壁部に2基の埋設土器をもち、玉斧を伴う20住などの集落内での位置付けは、この集落の構造を考える上で重要な資料であると思われる。また蓋石をもつ10・15住、あるいは4住のように土器の上半部が空洞の埋甕は、松本平では山形村洞遺跡などに類例があるが、本来埋甕の中は空洞であったことを示すものであり、埋甕の性格等を考える上で重要なものである。

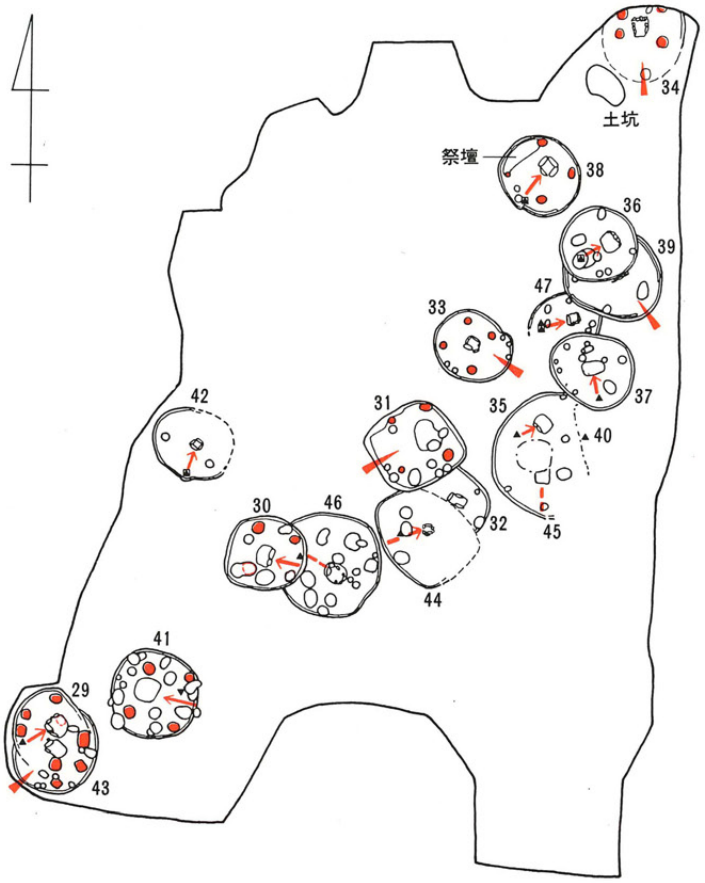
今回は遺物の整理等が行われておらず、現場での所見等に基づいた考察であり、断片的な問題点をあげることすらも十分にできなかった。またここにあげた以外にも、松本平の東側では初の沖積地の縄文中期集落の調査であり、その立地や周辺遺跡との関係など解明すべき問題点はきわめて多い。それらについては今後の課題としておきたい。

紙幅の制限により参考文献等については割愛させていただいた。ご寛容願いたい。

註　桐原健　1969「縄文中期に見られる室内祭祀の一姿相」『古代文化』21-3・4


祭壇
祭壇
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

第5図　A区想定図



第6図　B区想定図

凡　例

1．想定図

●埋設土器は正位のものを▲、逆位のものを▼で、それぞれ埋設された位置を示し、蓋石を伴うものは□で囲んだ。

●調査時の所見より、柱穴として考えられるピットを朱色で示した。

●朱色の矢印、破線などは以下の調査結果より主軸を示す。

↑（矢印）　埋甕があるもの

▲（楔形）　住居址の平面形及び炉の位置から想定する。

┆（太破線）プラン・炉等不詳で、現状より推定する。

●祭壇はその位置を示す。

2．住居址一覧表

●炉の形態は便宜上次のように表示した。

・（正・長）方、（楕円・円）形石囲炉……三方以上に炉石が巡るもの

・石囲炉……二方に炉石があるもの

・（石囲炉）……抜かれた炉石の痕跡が明らかなもの

・石置地床炉……一方にのみ炉石があるもの

●炉の規模は炉石を配しているものは石までを含め、炉石を破壊、抜去しているものについては、その時にできたピット（破壊痕）の大きさを示している。

●時期については、主要遺物により曽利式区分を当てている。

●遺物については、現在整理作業が進行中であり、備考では埋設土器と釣手土器など特殊なもののみを挙げている。

3．土器計測表

●ここでは図版で挙げた埋甕・ミニチュア土器を中心に法量を載せている。各々の埋甕の出土状況については「調査成果」で触れた。

遺構No.	平面形 規模（cm）	主軸方向	炉 形態 規模（cm）	時期	備考	
1	楕円形 508×(590)	N-34°-W	石囲炉？ (58×50)	弥生	5・6住より新。 炉内に焼土なし。	1
2	円形 529×521	N-57°-W	方形石囲炉 106×103	不明		2
3	不整五角形 623×280	N-12°-E	(石囲炉) 94×82	曽利III	炉石は一部を残し抜かれる。	3
4	円形 426×411	N-25°-W	楕円形石囲炉 83×52	曽利II？	炉石はまばらに巡る。壁際柱穴間に逆位の埋甕。北壁外・東壁外に埋設土器。	4
5	不整円形？ 436×(390)	N-14°-W	石置地床炉 92×87	曽利III	13住より旧。6住より新。 逆位の埋甕2個。	6
6	隅丸方形？ 465×(483)	不明	不明	曽利I	1・5住より旧。	7
7	不整円形 440×429	N-4°-E	(石囲炉) 107×92	曽利III	炉石はすべて抜かれる。 〝祭壇〟あり。	8
8	不整形 600×498	N-17°-E	方形石囲炉 102×82	曽利III	逆位の埋甕2個、うち1個は蓋石あり。 釣手土器出土。	9
9	不明	(N-87°-W)	方形石囲炉 106×94	曽利V	炉石は内側へ倒れ込む。	10
10	不整卵形 533×425	N-60°-E	方形石囲炉 113×93	曽利III	奥壁側に周溝と〝祭壇〟あり。炉石は一方を抜く。蓋石をもつ逆位の埋甕あり。	14
11	長方形 310×270	N-75°-E	方形石囲炉 75×70	曽利V	敷石住居。西に方形の突出がある。 炉内に焼土なし。	15
12	円形 621×605	N-54°-E	(石囲炉) 141×120	曽利III	周溝は埋甕部を除き、ほぼ全周する。埋甕は正位。炉石はすべて抜かれる。	17
13	円形 466×442	N-23°-W	石囲炉 97×87	曽利III？	5・14住より新。	18
14	楕円形？ 497×(270)	(N-32°-E)	不明	不明	13住より旧。	19
15	不整楕円形 547×443	N-48°-W	(石囲炉) 133×108	曽利III	16・18・27住より新。炉石は抜き炉内へ投入。柱穴移動の建て直し。埋甕逆位。	20
16	円形？ 477×(254)	(N-82°-W)	(石囲炉) 73×61	曽利II？	18・27住より新、15住より旧。 炉石の一部は抜かれる。	21
17	楕円形 299×254	N-77°-E	石囲炉？ (64×33)	曽利III？	小形の住居址。 炉内に焼土なし。	22
18	円形？ 530×(168)	(N-67°-W)	長方形石囲炉 38×(65)	曽利II	15・16住より旧。	23
19	円形 444×429	N-84°-W	(石囲炉) 128×111	曽利 II～III	炉石は一部抜かれる。	25
20	隅丸五角形 412×364	N-19°-E	(石囲炉) 104×91	曽利III？	炉石は抜かれ、炉内に投入。 奥壁部に埋設土器、2個とも逆位。	27
21	不明	不明	方形石囲炉 86×71	曽利I？		28
22	不整円形 419×415	N-75°-W	円形石囲炉 91×73	曽利II	土鈴出土。	29
23	円形 432×428	N-47°-W	(石囲炉) 91×80	曽利III	炉石はすべて抜かれる。	30
24	円形 570×(517)	N-27°-W	(石囲炉) 115×81	曽利III	一部調査区域外となる。 炉石は一部抜かれたか？	31

第3表　住居址一覧表

遺構No.	平面形 規模（cm）	主軸方向	炉 形態 規模（cm）	時期	備考	
25	方形 不明	不明	方形石囲炉 54×53	曽利Ⅴ	敷石住居。26住より新。	33
26	隅丸方形 364×338	N-11°-W	（石囲炉） 90×76	曽利Ⅲ	25住より旧。 炉石はすべて抜かれる。	34
27	円形 513×（431）	N-65°-E	（石囲炉） 82×71	曽利Ⅰ	15･16住より旧。炉石はほとんど抜かれる。 周溝は部分的にある。	35
28	円形 456×406	N-39°-W	方形石囲炉 63×55	曽利Ⅱ		40
29	楕円形？ ？×？	N-50°-E	（石囲炉） 113×106	曽利Ⅲ？	43住より新か？炉石は一部抜かれる。 正位の埋甕あり。土鈴出土。	41
30	円形 420×385	N-75°-W	（石囲炉） 116×89	曽利Ⅲ	46住より新。一部に周溝あり。 埋甕は正位。	46
31	隅丸方形 447×437	N-58°-W	不明	不明	32住より新。焼失住居か？	48
32	楕円形 374×（442）	N-59°-W	長方形石囲炉 100×55	曽利Ⅱ	31・44住より旧。 炉内に焼土見当たらず。	49
33	楕円形 416×359	N-51°-W	方形石囲炉 85×71	曽利Ⅲ	炉内に焼土見当たらず。	50
34	楕円形？ 430×？	（N-2°-W）	石囲炉 116×87	不明	一部は調査区域外になる。 炉内に焼土見当たらず。	51
35	不明	N-51°-E	（石囲炉） 112×72	曽利Ⅲ	40・45住と重複する。 正位の埋甕あり。	53
36	円形 415×389	N-55°-E	（石囲炉） 107×87	曽利Ⅱ	39住より新。「蓋石をもつ正位の埋甕」は有孔鍔付土器。	55
37	不整円形 450×418	N-11°-W	地床炉？ 120×80	曽利Ⅲ	47住より新。炉石は抜かれたものか？炉内に焼土は見当たらない。正位の埋甕。	56
38	円形 420×410	N-38°-E	方形石囲炉 110×107	曽利Ⅲ	焼失住居。周溝は一部に見られる。ベッド状の〝祭壇〟あり。蓋石をもつ正位の埋甕。釣手土器2点出土。	57
39	楕円形 544×（487）	N-49°-W	（長方形石囲） 144×81	曽利Ⅱ	36住より旧。 途切れながら周溝が巡る。	58
40	不明	不明	（方形石囲炉） 不明	曽利Ⅲ	35・37住と重複する。正位の埋甕と炉をもって本址とした。炉底に土器を敷く。	61
41	円形 471×471	N-75°-W	（石囲炉） 126×121	曽利Ⅲ	炉石はすべて抜かれる。建て直しの住居址か？逆位の埋甕あり。	63
42	楕円形 389×（430）	N-25°-E	方形石囲炉 62×52	曽利Ⅲ？	一部が突出。蓋石をもち、底部を欠く正位の埋甕あり。	64
43	円形？ 447×？	（N-32°-E）	（石囲炉） 128×111	曽利Ⅱ？	29住より旧か？ 炉石は一部抜かれる。	66
44	隅丸方形？ （540）×？	N-78°-E	方形石囲炉 48×47	曽利Ⅳ	32住より新。 正位の埋甕あり。	67
45	不明	不明	（石囲炉） 87×78	不明	35住との前後関係不明。 炉石すべて抜かれる。	68
46	不整円形 570×？	N-48°-W	石囲炉 124×92	不明	30住より旧。	69
47	楕円形 （340）×？	N-69°-E	石囲炉 67×51	曽利Ⅲ	39住より旧。炉底に土器を敷く。 正位の埋甕２個（うち１個は蓋石あり）	70

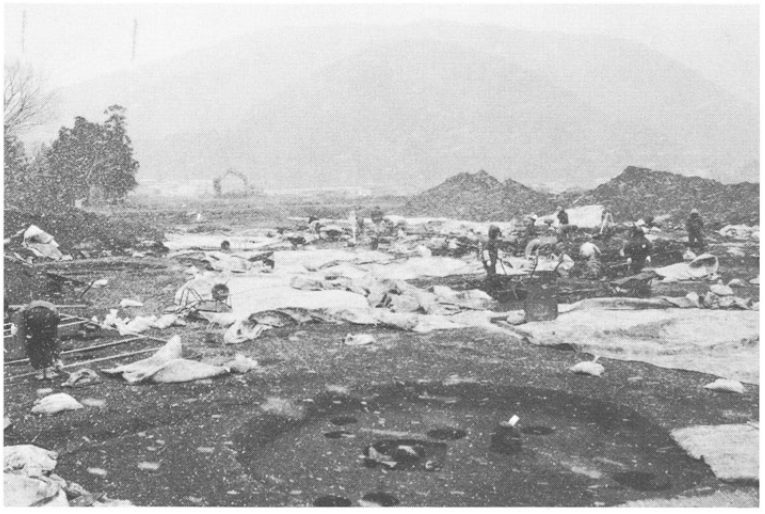
B区の調査風景（北西から）
白く見えているのは雪です。

雪が降った次の日
除雪とポンプを使用しての排水作業、足場が悪く、大変でした。

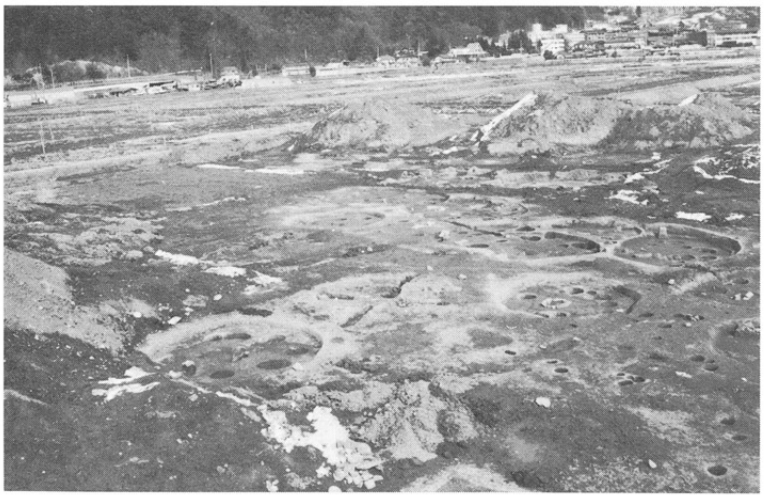
A区の調査風景(南から)
掘り下げと測量を行なっています。

調査風景　1

A区の調査風景
地面に広げてあるシートは凍結を防ぐためのものです。



吹雪
このような気象条件の中でも調査は続きました。



A区
すべての調査が終了しました。

調査風景　2

松本市文化財調査報告　No.96

松本市大村塚田遺跡

平成４年３月20日　　印刷

平成４年３月20日　　発行

編集　松本市教育委員会
〒３９０　長野県松本市丸の内３－７
TEL 0263（34）３０００

発行　　松本市教育委員会

印刷　　アサカワ印刷株式会社